第四百九十二號目次

◎社說
自貴自任の氣慨
續海舟餘波(五)
基本金募集論
私立學校令

◎評論
正氣歎中の人
(雪嶺 田中正造氏を論ず)
海舟餘波を讀みて(山月子)
帝國主義

◎女學
笑の文學(完結)無識庵
恥の文學(一)無識庵
佳人七つ道具(青柳有美)

◎雜錄
海舟先生逸話(一)
十三年ぶりにめぐりあひし
婦人に贈れる書(一、二)無名子
いかづち物語(四)久保ゐの吉

◎隨感
靈性の感應○鎭撫の術、等々段々あり○松も亦た友ならずや○海姉吟○穩健なる成効○御心を知る○品格の果し合○活ける眞理に吸ふ樂しひ哉○雜草の美

◎寄書
日本演劇に於ける伴樂器の性質(巖木露草)

◎片々

◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即はち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾儕の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	
壹冊定價	拾錢
半年分定價	壹圓拾錢
一年分定價	貳圓

(內國無郵税)

◎代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事 但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事

廣告料		
一行(廿七字詰)一回		前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

送金 送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割增にて計算せられたし

明治三十二年七月廿四日印刷
明治三十二年七月廿五日發行
發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場
(電話本局十九番)

女學雜誌社出版書目

巖本善治著 再版 海舟餘波 正價金三十錢 郵税金四錢

巖本善治著 吾黨の女子教育 正價金十錢 郵税金二錢

巖本善治著 公娼可滅 正價金三十錢 郵税金二錢

島田三郎、植木枝盛二君合著 廢娼演說 正價金二錢 郵税金二錢

櫻井成明君譯 腓立比物語 正價金二十八錢 郵税金六錢

横山雅男君著 婚姻論 正價金十二錢 郵税金四錢

若松賤子君譯 再版 小公子 正價金三十五錢 郵税金八錢

故若松賤子英文集 英文 巖本嘉志子 正價金六十錢 郵税金六錢

布川靜淵、故小此木秀野君合著 俳諧史傳 正價金二十七錢 郵税金四錢

故鈴木弘恭君述 七版 百人一首講義 正價金二十八錢 郵税金四錢

同 文法口授 正價金十二錢 郵税金二錢

女學雜誌

第四百九拾二號

明治三十二年七月廿五日發兌

社説

自責自任の氣慨

◎何が悪るいと云ふのでない、力量のないのが悪るいので、何人が善くないと云ふのでない、自から任じないのが善くないので、方今の病弊は一言にして足りるとである。

◎『時勢』と言ふ言葉は、懦夫と達人とが屢ば用ゆる所であるが、達人は之によりて猛烈なる氣慨を和らげ、懦夫は之によつて卑怯千万なる言譯にして居る。時勢の運行は、天道の發現する所ろで、達人は無論、大順自然の心得を失わぬやうに之に乘じてゆくのであるが、苟且にも、其一己を忘れて、本領を埋沒するようなとは爲ぬ。所詮は、時と云ふ驥馬に跨がつて、勢と云ふ流を下るので、自然の運行に從がつて無爲に放任するようには見へるが、我が手に手綱を握つて居るゆえ確かなものである。シカシ、懦夫の時勢を談ずるは、丸るで之を裏腹である。

◎よく人の言ふとに、『アレは時勢で出來た』『アノ人は時勢に作られた』などと云ふが、もし時勢の力ばかりで出來るものならば、其當代の總ての人が皆な左樣にならねば成らぬ、其の當代の仕事は皆な成功せねば成らぬのである。然るに、同じ時勢の恩波に浴し乍ら、異とに能く時勢に合したるときは極少で、時勢に從ふて出來た事業も亦た極めて少ないとを知らば、時勢なるものゝ爲し得る區域は、決して廣くないと云ふとが直ちに分る。

◎心を構えて奮然として起てば、事に順境逆境と云ふべき區別は決してない。あるとしても、有ると云ふほどに長く續くものでない。續くとしても、心に安んずるほどに久しく續くものでは決してない。順境だと思ふて氣をゆるせば、既に逆

境の初めで、逆境だと思つて氣を締れば、既に順境は萠して居る。况んや、順逆は、勢力の向背、風向の南北の如きもので、其のムキに隨つて、柁を取れば、何れにしても活用するとを得べき助けとなる。禍を轉じて福となすの工夫は、策によるにあらず、僥倖によるにあらず、只だ一片有爲の精神によるとで、慨然心ろに決して、奮つて、逆境を相撲相手にしよふと云ふハゲミさへ起れば、禍機既に一轉して福根早くも下に兆ざして居る。人事の成敗は、機微刹那の間だに夙に了く々として決して居る。

◎左れば、意氣悄沈すれば百弊蠱の如く生ず。氣慨一と度び躍れば、百善曉の如く輝やく。たとひ、何等の反抗、何等の妨害、又何等の損失ありとも、不屈不撓の精神、火の燃ゆるが如く燃え立んに、何等の冷遇を恐るべきや。笑止千万の事ではない乎。天下に恐るべきものは、上帝に棄らるるとの外には、自から棄つると云ふの只一事である。自から棄てざるほどのものを、上帝の棄て玉ふ筈は斷じてない。自から信ずるが即はち上帝に信ぜられて居る一つの大證據である。左すれば、亦何に恐れ、何に屈せんとするか。千万人ありとも吾征かんと古人は言ふたが、わざ〳〵征くにも及ばない、打ちやつて置ても差支へないのである。

◎只だ憫れむべきは、力量の足らざるとで、自から恥づるは即はち之である。情あり、精神あり、抱負ありとも、折角の善心を行つて、事實の上に人の益を奏するとが出來ねば、遺憾極まりないとである。餓たるものに、一滴同情の涙を寄せれば、喜こぶに相違もなく、同じ死ぬとしても成佛して平安に眠るかも知らぬが、矢張り死ぬので、人事の事業の上から見れば、殘念至極の事である。之を救ふには力量がなければならぬ。力量の足らぬと云ふは、一大遺憾である。

◎現在の多くの失敗、多くの弊害、隨がつて多くの不平慷慨を見聞して、人の互ひに相責めて、交も相罵しるの聲は隨分慘ましいとであるが、吾輩の考へでは、誰が惡るいのでもない、つまり力量の足らぬのが惡るいので、もし力ある人あつて大慈救濟の術を施こし得ば、囂々たる今の輿論は、頓に閉息するであらふかと觀て居る。

◎然し、何處、何如なる世に於ても、其の力量ある人物が、忽然として湧き出るものでもない。三年たつて三ッとなり、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

追々にして其の人物となるので、英傑にせよ、達人にせよ、初めから出來上つたまゝで母の胎內を躍り出たものでは有まい。世から言ひ、敎師から言へば、之を敎化開發すると云ふのであるが、夫もまだ末の事で、ツマリは其人本人が、自から工夫し、自から得て、遂に其丈けの人物となるやうに辛苦せねば成らぬものである。此の自からの辛苦と云ふが、即わち、自責自任の氣慨で、人苟くも此の氣慨から步み出さねば、學問經驗はミナ無益である。

◎人もし自から責め自から任ずるにあらざる以上は、寧ろ世上の事に對して盲となり啞となるが宜しい。慷慨して人を責め乍ら、自から責めず、痛罵して人の手落を誹り乍ら、自から任ぜず、失敗を當局者の罪にのみ歸して、敢て恥かしいとも思はぬと云ふは、何等の愚痴であらふか。世上茫漠、天下の事は大事である。ソレを僅かに當局者位に求めて、之を責めると計り考へて居ると云ふは、如何にも思慮の足らぬ話しで、左樣の人物にいよ〳〵事を任じて見たらば、又更に同僚を責めるか、事情を責めるか、到底不平のみで、事の擧るものでは決して無い。昔しから、夫はキマりきつたことで、山を

出でた經世家が、いつも名を落したは此の故である。國士を以て任ずるとか、世の事を憂ひるとか言ふ以上は、局にある、あらぬによつて、責任に相違があるやうでは、恥辱千万のことで、西洋の立憲政躰で、政黨に求める所の道德も矢張り此處の事である。地位を得るも得ざるも同一に蹇々沖々として苦心することが無いほどならば、寧ろ天下國家などと言つて、世事を心配することを止める方が善い。其方が殖産の爲にもなつて、ツマリは國家の爲である。

◎人物がないなどと云ふとは、メッタに言へぬ。第一、自から、人物になる氣慨をやめて仕舞つたの乎。又は、天下の人を人物に仕上る丈の雅量をもつて居るの乎。其邊一向に思慮もなく、タヾ人物がない〳〵と言へば、夫で自分が少し人物らしく見へると思つて居る。恥を知らぬ情けないことである。

◎以上は、固より他人の爲に言ふ積りでもない、自分の戒しめで、一種の隨感である。又、必らずしも、國家の事に付て計り言ふものでない、一家、一小事業に付ても皆な此の通りであると思つて居る。此の主意をよく考へて行くと、到底、默して實行するの外ないが、默する位なら、雜誌も止めて仕

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

舞ねばならぬ。吾同人諸君と思つて、現今の時弊、又、其時弊にかぶれ易き吾等の時弊として、此の一篇を記す。

續海舟餘波（五）

◎維新當初の抱負は所云ゆる大帝國主義で、盛んに經綸を施こし、四海天下に威を輝やかすと云ふ隆大なる理想であつたるに、藩閥の控制、藩内の小是非、功臣元勳たちの互ひの衝突より、明治二年にして既に意氣悄沈の機端を顯わした。當時、南洲あり、甲東あり、松菊あり、其人あると無論今日の比ではないが、夫でさへ滿朝の俗論に臂を抑えられて、事々思ふ樣にならなかつた故もあらふし、又彼の三傑自身すら、身一と度び局に當つて見ると、實際は意外の事計りで、薩長一介の書生として、漫りに慷慨なる言論を吐いて居られた時とは、余程趣の變つたとがあつたらふ。此時に於ける第一の刺激者は即わち海舟先生で、筆に口に幾度か鼓吹激勵の勞を取られたものと見へる。明治二年六月の建白文に、

今哉、太政御一新の際に候へども、いまだ全く鎖國の陋習をば出させられず、其たゞなかと存候。其の子細を申さば、凡そ國の兩間は、平と戰とを申さず、一張一弛、彼我の情體を明察し、其攻守の法を明らかにし、宇内の形勢を洞察し、以て我國勢變遷せしむるの基を固く成すを以て急務とは存候なれ。然るに下民上を信ぜず、外國の者等、諸港に居て是が籠絡たへず、人氣萎靡して唯其言責に苦しむが如きは、譬ば一城にたてこもりて、內應反間に疑惑し、擊て出づべきの勢なきが如くにて候。當今の形勢を申候へば、皇國を一城とし、三千餘万の人種此國內に籠居して、相疑相嫉妬し、小是を咎めて國外に强敵あるを知らざるが如き歟。是れを攻守を明かにし、彼我を詳かにせりとは申すべからず、誠に籠城の困苦の屬とや申さむ。故に此萎靡せし人氣を以て瑣國の陋習とは申候哉。今哉、諸局盛大の御世話あるに似たれども、國內の大算を詳かにせざるが故に、其御用途行詰り、楮幣を以て一時の窮を助けられんとすれども、いまだ上の御信議立たざるを以て、下民恐れ疑ひ、外國其不便を唱へ、亦惡貨引替の事起れりとこそ承われ。先々年、幕府洋銀引替の爲に、巨万を失ひ、其の用途に苦

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しめりと雖ども、唯五十歩百歩の違と存候。たとひ正金銀を以て貨幣造り出させむも、國民をして漸やく一致に向ふにあらざれば、如何ぞ外國の士民の爲に國財を失ひ國內困迫に到るを遁れんや。臣が主家終に國をして盛大强勢に成す能さず、外國の所置よからざりしを悔玉へり。是深く恐れおもふの餘り、愼み戒しめて今日に及べり。世間其深意を察せず。小臣數万、其饑渴をうらみ、しきりに怨恨する者多しと雖ども、吾主誠意を以て動かざるゆへに未だみだりに亂爭の事も聞くべからず。上者之を察し玉はずと雖ども、我輩今に申さん詞あらんや、空く皇天昭々百年にして其議定るを俟たむ而已。凡そ富國强兵の基は、國民上を信ずるを申歟。下民上を疑ふ時は、全國の基本固からず、是其因て來る所、上は卓識なく、規摸狹小なるを以て、上意下に貫徹せず、實議誠大より出ざるを以て、下民上意を推知し、詐謀行はれ易く候と存候。豈に空しく利器と貨幣の多きを以て富國强兵の基と申さん哉。あゝ我邦內いづれか日本の民ならざる。饑渴して死するあり、恨みて死するあり、是を信じ彼を憎む、愛情私執に陥て、公を失ふが如し。

此故に內整はず、上を信ぜず、萎靡して小是非に得失し、各持用の勢を張る、何れの日かまた國勢の進歩を仰がむ。抑も方今の急務、國を辱めず、民を富するにある歟。政府獨り富めりとも又如何せん。遠く月民の破れたる、近く支那の內亂皆な國內の究迫に初まれり。如何ぞ獨り東洋諸邦に遠大の眼光なからん哉。舊官吏、佛蘭西の官吏を偏信し、國財を失ひ、恨を傳へ申たり。其上、又英人の憤を懷けり。今日また一邦を偏信し玉はゞ、また前車の戒に戻り玉はむ歟。舊は幕府を罵しる外國人甚だ多かりしに、今は朝臣を罵るもの多しと承はる、是其因あるにあらず、人情皆如斯。外國の交際に至りては、尤も正々堂々、誠實に出ざれば、甚危ふく候。全國の力を一致し、之に對すとも猶足らざるを愁ふ、况ん哉、小民上を信ぜず、上下費弊す。上下眞に一致の實政なき時は、危きを知るべき而已、何ぞまた我微賤の論を待ち可申哉。政府の正府なるを文明諸邦と申が如き歟。文明諸邦といわれざる限りは、其政府公私混交して、知らず知ず其政私になれ安く候か。利權を弄して下を苦しめ、私執を以て人を擧げ、强勢をかりて媚を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

下す等、是を公と可申哉。此事は誰も能々存知たることながら其實跡なきいまだ眞知にあらざるを知るに足れり。唯其傍議を恐れて虚飾を旨とし、令告を公明にして口を塞ぐは、いはゆる東洋諸邦の習歟。此故に文明諸邦に手を措くゆへんの基歟。在上の賢臣厚く此意を注がれむとこそ邦人の千万願思ふ所に候なれ。天下の大事は眞策を問ふにあらず、衆議にあらず、唯其任用すべき人を得るにある歟。任用して不疑、其力を伸ばさしむ。若し其人を得たりといへども、臂を引き、機を忌むに於ては、かつて其人常人に過ぎずと存候。昔し楠氏の笠置に到れる己一人、天下の大任に任じて、謙遜の實なし、又眞策を献せしにあらず、終に機の卒を以て關東數万に對して大義を天下に唱へたりと承り候。其後、還幸に及びては、官軍大衆、往日の比にあらず、英士雲集、眞策善圖、百出に及候へども、末は寥々として蒙塵たる事に及び候ひき。此際、楠氏先日に劣れるに非ず、傍議鼎沸、所云ゆる臂を引きて其機を失し、却て他將に其優劣を比するは如何に候哉。事は昔に似ざれども、傍議空論忌機の如きに到候ては、千古一轍、人情豈に往時に異也と可申候半哉。在上の御方々、宜しく御注意の要あるべき所歟。凡そ其論高くして其事業なきは、東洋の陋習に候歟。往時、米國渡來の折は、一驚して議論少なく候ひき。其後開鎖の論興りて喋々七八年、其孰れか是なるを知らず。昔し、天草の一揆おこりて外國の通商を禁せしに、いまだ開鎖の議ありしを聞かず。此時哉、侯伯よりして諸士、戰國を去る遠からず、出て擊の氣力衰へず。我國家の害を慮ばかりて、擊て通商をとめたりと承わる而巳。其識もまた想像するに堪へたり。豈に開鎖の文字に膠泥して是非得失兩つながら其全を誤ざると同日の談に候半哉。今哉、封建郡縣の議あり。我國侯伯、四方に在る必らず封建の制に意あつて然るにあらず、戰國の勢、因循して成れる而巳。また之を眞の封建と申候哉。其今日の姿あるは、後世装飾せし而巳。今にして其の護國に害ある、よろしく其制を改めむに、何の害をか生せむ。嗚呼、邦人、生國に報ずるを知らず、字議と目前に泥みて、傍議百出す、易きを以て難とし、近きを以て遠とす、徒らに支那習に陥て事業は萎靡す、是小臣愚昧の解せざる所に候。昔し福島正則、

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

藝州を除せらるゝに當て、時勢を洞察し、是を拈る舊轍の如し、其臣下もまた順々として去る。此時哉いまだ外國今日の如くに候はず、其の勢の恐るべからず、一戰の無用にして輕擧盲動の益無きを明察せしなる歟。正則は一武夫にして尙ほ其識如斯に候。今哉、海外の船舶往來して、巵日なし、我邦人誰か是を顧みざらむ。表に厥國を唱へて內心恐れを懷くが如きは、何ぞ其陋にして劣り候事や。大是は世人是非する能はず、大手段は世人目して拙とし可申候。奚を以て、事業に施こすべく候歟。其知術を以て相是非相得失するもの出る歟、其實は是等大手段中の小目にして、皆な其範圍內のものにて候。鄂氏の歐羅せし、華聖氏の米國を獨立せしめたる、其後議益精しく、利益開けたりといへども、皆な兩氏の範圍中の事にして、其上に出づるは能はざるべく候。況哉、今我國萎靡せし人氣なるを以て、其の事業は巨にして大なるべく候。遠大を施こすと雖ども、巧智を出でず、小目を見て大節を失ふに及び可申歟。今世大業は成し易く候歟。世人傍議沸々たれども、大抵皆其の小圈內に是非得失して、かつて圈外を見るとなし。是を以て其成し安く、成りがたからざるを推知す。たとへ傍議百出盲動すとも、意識誠大、欺かざるを以て是等を包羅せんに、如何ぞ難きあらむ哉。若誤て術數を用ひば、破れて亂麻の如くなるに到るべく候。

巳己六月

◎是れ正さに三十年前の忠告であるが、宛がら亦た今人に對して說法せらるゝと同樣に感ぜられる。人情は古今變はらず、卓識はいつの代にも活動するものゆへ、當時の人情に對して喝破せられた卓識が、現代にも尙ほ生キ〳〵として躍るやうに覺える。

基本金募集論

◎如何なる事業にも基本金を募集するが、近頃の流行である。而して、基本金さへ出來れば、其事業の基本が成立した樣に思ふのも亦た流行である。同もに、馬鹿らしいとである。

◎試ろみに、成り上り者の俄か身上を觀るが宜しい。家に何万の財産を積み、其の利子によつて子孫を養ふとが出來る樣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にして置けば、子孫は寝て居ても食べる筈だ。斯様にして置けば即はち家の基礎は確實になつたと思はれるのである乎。眞とに淺墓なる考へではない乎。家に何程の收入があつて、之は寝て居ても護られるものだと定まると、宛がら、空氣か水の様なもので、是非少しでも欠くことの出來ぬ必要物となる。少しでも欠くことの出來ぬ必要物となれば、たとひ其の額が何程多からうとも、之より少しでも欠いては大不自由を感ずる。其の感じ方は、貧乏人が感ずる不自由の感覺と少しも變りはないので、ツマリあれ丈けの額が日常入用の標準となつて仕舞ふのである。此の標準から下に降りるのが、即はち困苦で、所謂ゆる「維持が出來ぬ」と云ふ境涯に陷いるのである。もし又、斯様な掛念の入らぬほど十分に貯畜が出來たとすれば、其の貯畜に委賴して錢遣いが荒らく、又自分で、經濟の困難を仕たことが無いから、錢を粗末にする。或は欺され、或は山にかゝり、或は放埓に遣つて、迚も長く所持することは出來ぬもので、俄か富限の家にたゞ錢金を遺した丈けでは、決して一家の基礎はたゝぬ。之によつて推考して見ても、一般の事業の運命が直きに分る筈ではない乎。

◎基本金の出來ると云ふものは、金丈け出來るのが望みではない、金と同もに無形の基本の出來るのが望みで、つまり此の無形の基本に相添ふて黄金の基本金が出來るから確實なのである。無形の基本とは、其事業に對する同情、信用は固より、局に當るもの丶經驗、練磨、節制、儉約、固定不變の特色等にあるので、もし之が同時に發達して其の基本金に伴ふにあらざれば、よし一時基本金は出來ても、基本は決して定まらぬ。反つて、基本を危ふくすることがある。

◎ナゼと云ふに、屍のある所に鷲あつまり、利のある所に人集まるの喩えで、もし容易に基本金などが出來れば、夫こそ災の初めである。種々の人、種々の意見、種々の慾望が之に伴隨して、種々の方面に利用せんとかゝるものである。即わち、折角、根をつけ、幹を太らせよふとする事業も、之に基本金のある爲に前后左右に引張られ、遂には少しづゝ枝葉をもがれ、決して十分なる發育を遂げぬものである。

◎お祭の時には、よく金が集まるものだが、集まつた丈けは集めた人が寄つてたかつて飲食を仕て仕舞ふ。夫故、金が意外に餘計に集まりでもすると、必らず亦意外に餘計入費

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

が掛るもので、寄附の多い時ほど不足が多いものである。基本金募集も之と同じ事で、大勢の人が寄つてたかつて、無理に、急に、騷ぎ乍ら、集めると隨分集まる樣であるが、必らず存外の入用がかゝつて居る。もし幸わひに此の入用が掛らねば、其丈け多くの人の氣が掛つて居るので、金が集まつたる以後の「說」と云ふものは亦恐ろしいほどである。船頭が多くてさへ、船が山に上るものだ、初めから、山に上らふと云ふものと、川に下さふと云ふものとの衝突で、ツマリ其事業に氣をかけて居る人の多いほど、早く寄つてたかつて、叩きつぶすのである。

◎事業は、生長せねばならぬ。生長は、一の生命を中心として、一樣に同化し、一躰に和合し、一貫して叙々と伸る所が無ければならぬ。砂を集め、土を重ね、石を積みたるやうの事では生命がない。人の事業とは言へぬ。

◎夫故、基本金の余り早く出來るのは、決して祝すべき事でない。否な、出來るのが惡るいのでは無いが、ソノ基本金計りが出來るのが宜しくない。有形の基本とともに無形の基本を積み、集まつた金に委賴し、金を以て其事業を維持しよふと云ふやふなケチナ考の起らぬ丈けに、精神が練熟して、風氣が固定して、其事業に一種のクセが附て居らねばならぬ。家に於て言わば家風、人に於て言わば氣風と云ふ如きものがチヤンと出來上つて、容易に興に乘らず、容易に奢らず、確乎たる精靈の基礎が備わつて、而して基本金はたゞ之が用を爲すに止まると云ふ次第でなければ、基本金を賴みにする事は斷じて出來ぬ。

◎ナゼ、近來、斯樣に基本金募集が流行するか。之は、急進突飛の時代に俄かに擴張した事業が、あとで維持しがたくなつた經驗に懲りた柄であらふが、「只だ基本金を募集してもまだ決して賴みにならぬ」と云ふ新經驗をするの日も、亦た遠からぬ事であらふと信ずる。

◎凡そ、物は擴張するは易く、維持するは難いものである。興に乘つて盛んにしたものが、あとで其の始末に困まると云ふはよくある事である。會社でも、學校でも、事業でも、ただ滿潮の水工合を考へて、大きくすると、あとで其の家の大きいのが目に立ち、ガランとあいて、幽靈でも出そうになるものである。滿を引いて放たず、放つて後ち矢を拾ひにゆく

は、古しから難事として戒しめてある。

◎世上忙々たる名家名流の才子、もし今ま審らかに思慮して一時の興を冷まさねば、基本金の出來た爲に基本を毀ち、盛んになつた爲に盛運を害し、自分の繩で自分を縛するやうなとになりはせぬ乎。之は決して老婆の心配ではない、大いに事を成さんとする青年の心配であらふと思ふ。

私立學校令

彌よ發布せらるべき私立學校令なるものは、抑そも如何なるものなるべき。吾人は、其の益もなく害もなく眞に存外のものなるべしと想像す。何んとなれば、凡そ物、其の未だ現われざるに當つて兎角の評判の八釜しきものは、其の彌よ現わるゝに方つて、餘りに詰らぬものたるに驚ろくを人世の常とすれば也。

吾人屢ば言へり。文部大臣たるものは、餘りに學校の事に熱心す可らず、學校以外に文政の事太はだ多ければ也と。私立學校令の如き、餘り氣に掛け玉はざるを可とす。法令多くは徒法なり、民間士人も亦餘り氣に掛けざるを可とす。

評論

正氣歌中の人

雪嶺、田中正造氏を論ず

近日の快文字は、三宅雪嶺が、「日本」帋上に、田中正造を論賛せる一文章にあり。

雪嶺先づ、道破して曰く、

東湖の正氣歌に、昇平二百歳、斯氣常獲伸、然方二其鬱屈一生二四十七人一とあり。明治の世、正氣大に伸んとして而して漸やくにして鬱屈し、其極まらんとするや、乃ち一の田中正造を生ぜるにあらずや、と。

嗚呼、田中氏の知られざる久しい哉。而して、世人之を知らざるの所以も亦た拙なき哉。見よ、無辜數万の民、一商夫の爲に祖先遺傳の良土を害せらるゝも、有司恬として顧みず。鑛毒、銅臭、到る處ろに滿てり。熱血、田中氏の如きもの、豈に激せざるを得んや。其の辭令に嫺わず、其の禮數に疎そ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

かに、屢ば野猪咆哮の態あるもの、寧ろ至當の情にあらずや。而して、世上虚飾の徒、之によつて誤解し、嘲けつて笑ふ。如今たとひ、禮文に泥みて、生命に活きざるの陋習連りなりとすとも、是れ豈に餘りの盲評にはあらずや。

此時に方つて、雪嶺の文あり。雪嶺も亦た數多の誤解中に濶歩するの士、所謂る學界は此の純儒を容れず、僅かに一部青年の爲に崇拜せらるゝ耳。古人曰く、國道なければ、用ゐらるゝを恥とすと。當代に於て數多の誤解を惹くものは寧ろ士の面目と云ふべき歟。蓋し雪嶺素と正氣歌中の人。此人今や田中正造の爲に辨ず、眞に近來壯絶の歌吟にあらずや。

然り、衆盲論評の是非は素と顧みるに足らずとするも、救濟の事業にして、世の贊同を得ず、非凡殊勝の熱誠にして久しく反應を得ざる、眞に絶大の恨事とす、而して、今や、此般の快文字を見る。爲めに涙潸然たるもの、ひとり礦毒地方の人士のみにはあらざる也。

雪嶺の文に云く、

かゝる世代に人の田中氏を知るなきこと、固より當に然るべき所なるも、其の知るなきや餘りなりと謂ふべし、只だ一種の變物とし、奇人とし、甚しきに至りては濫りに俠を衒ふの僞物とするなり、已れを利する者の爲めには非を是とし、已れを利せざる者の爲めには是を非とし、黄鐘を毀り瓦釜を響むる、元と濁世の習とはいへ、寧ろ甚からずや、田中氏は彼等が邪推するが若く然る者にあらず、全身總べて是れ精神、總べて是れ熱血、但だ幾許か掩ふに滑稽を以てするが故に、嘖嘖者流の爲めに滑稽漢として誤認され、嘲笑を以つて迎へらるゝなり、氏が正を踏みて恐れざるものなること、其の一生の行動之を證して餘あり、謂ゆる犧牲獻身、氏の若きは蓋し明治年間一人のみ。不幸にして氏は無學文盲なり、復雜なる理論に通ぜず、僅に目のあたり弊害を睹たる鑛毒事件に全力を注ぐことゝなれり而かも一事件に勞して屈せず撓まざる者、議會ありて以來獨り氏を推すべし、一地方の一小事視せられし者をして、兎に角天下に鳴り響かし、政府の難問題たらしめしもの、洵に偶然にあらじ。氏は屋と多少の財ありし者、今や一貧洗ふが如し、而して如何なる賄賂も斷々として受けず、古川に求むれば、安樂に老後を送り得べきに、氏は毫末も斯の如き鄙心なし、氏の養母及び妻は郷里に雜貨を賣りて自營し敢て氏を煩はさず、亦た賢と謂ふべし、然るも氏は自ら支ふるのみ、復た運動費の餘地あらず、而して一たび起ては、招かざるに數千の農夫潮の如く上京し、警察も之を奈何ともする能はず、憲兵をして馬脚之を蹂躙せしむるに至る、是れ果して常人の能く企て及ぶ所なるか、氏固より金に究す、而も議會に於て既に歳費の增加を非とし、其の非とする理由よりして歳費の全く受く可らざるを信じ、乃ち之を抛つこと弊履の如し、選擧人の補助せんとするあるも、亦た辭して受けず、身を挺して天下の爲めに天下の非を矯めんとす、其の從事する所の者、天下大に比して至て小なるが如しと雖も、謂ゆる一夫不得其處則思猶己推而納諸溝壑の意あり、聖人の心を以て心とする者といふも決して溢美ならじ、若し氏をして幕府時代に生れしめば、既に甘んじて磔刑に處せられしならん。是氣所磅礴、凜烈萬古存、當其貫日月、生死安足論、地維賴以立、天柱賴以尊、氏は豈に能く是氣を養へる者に非ずや。

嗚呼、よく言ふて其の誠を盡せるもの、吾人亦た何をか加へん。但た必らず一辭の添えざる可らざるものは、雪嶺の所云ゆる「一たび立ては、招かざるに數千の農夫潮の如く上京す」の贊評にあり。是れ寧ろ、田中氏を賛せんとして、反つて其の志を沒するもの、些さか遺憾なきを得ず。蓋し、世上往々雪嶺の好意を以てせずして、只だ此の誤解を懷き、田中氏を見て煽動の野心あるものゝ如くするものあり。是れ豈に至大の誤解にあらずや。

吾人が知る所を以てすれば、田中氏は、鎮撫の爲に其勢力の八分を費やせり。所云ゆる請願、復舊等の運動は、爲に十分なる盡力を得す。其の請願事務所の事務の過半は、殆んど鎮撫の勞を以て了れるは、親しく見聞する者の皆な知る所也。若し一田中氏なかりせば、足尾の下、渡良瀬川の頭、明治昭代に流血横屍の慘劇を見んと、已に幾回なるかを知らざりしなるべし。而も、世人、田中氏の外、激にして內、靜なる英資を見ず、其の時として咆哮獅子の如くなる聲を聞くも、日夜慈々喃々として憐れむべき無辜無學の農民に說諭しつつある鎮撫の聲を聞かず。反つて氏を目して激動家となすも、未た嘗て其の平安の福音を悟らず。嗚呼、もし田中氏なかりせば、幾多の官吏、幾多の名士、斯く久しく長夜の安眠を貪ぼることを得ざりしならん。

海舟餘波を讀みて

山月子

海舟先生在世の時、余は親しく之を見て敎を受けんことを欲したり、而して常に其時なく、去年の夏や、其時を得たりしも、當時自ら思へらく、魯鈍下劣、未た先生の敎を受くるに堪へず、尙一年の修練を經て後にせんと、心密かに今夏を以て、其高敎に接せんことを期したりき、何ぞ料らん、一月廿一日、俄然として先生永眠の報に接せんとは、哀慟痛惜措くこと能はず、而して余は爲めに一言を出すこと能はざりき、海舟餘波出版の廣告出るや、余は書肆に命じて、最とも早く取り寄せて之れを讀みたり、明敎を崇むること多々、感化を受くること少なからず、余は著者が此の書に對する批評を公衆に求めらるゝを見たり、幾多の批評の女學雜誌上に載せらるゝを見たり、而して余は此の書を評せんには、自己の餘り

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

卑きを思ひ、未た一言を出すこと能はざりき、

五月下旬、余腦に患あり、且一事を案じて精神頗る悶々たり、偶々女學雜誌掲載の『續海舟餘波』(二)を讀む、其謹愼の心、忠誠の情、遠大の識に感ずること深し、曩きに讀みたる『海舟餘波』の記憶、又新たに胸底に浮動し來り、髣髴として稍々先生の靈に接する所ありしが如きを覺えぬ、

其夜精神冴え、眠らんと欲して眠るに難く、床中恍惚として思ふが如く、思はざるが如く、考ふるが如く、考へざるが如し、忽然として思ふ、

嗚呼海舟先生は、諸葛武侯に似たる所あるか、

と、

武侯子を戒むる書に曰く、

君子之行、靜以修レ身、儉以養レ德、非ニ淡白一無ニ以明一レ志、非ニ寧靜一無ニ以致一レ遠、夫學須レ靜也、才須レ學也、非レ學無ニ以廣一レ才、非レ靜無ニ以成一レ學、慆慢則不レ能レ研レ精、險躁則不レ能レ理レ性、云々、

武侯が時勢を識り、人物を識り、時務を識り、後世を識りたるは、彼か一『靜』字の素養より出で來りたる所、其政事を處理し、經濟の道を建て、內、民を安んじ、外、敵を怖れしめたるものは、其『靜』より發せし『陰德』の致す所と謂はざるべからす、海舟先生の精神、事業、亦實に其『靜心誠意』の工夫より出で來りたるものか、蓋し其誠や、世の所謂誠に非ず、一部敎徒の所謂正直に非ず、實に神に通ずる至誠なり、其智や、世の所謂智に非ず、策士輩の所謂才智に非ず、實に神に通ずる靈智なり、故を以て能く正しからざることなく、善く中らざることなく、好く適せざることなし、余は此點に於て、頗る先生の武侯に似たる所あるを觀る、二人共に一貫の道に立てるを觀るなり、たゞ彼我人物の性格を異にし、位置を異にし、境遇を異にし、時勢を異にするが故に、似ても似つかぬ外觀を呈せしものならん、

世、或は先生を以て禪僧に比し、片桐且元に比し、ヴォールテールに比す、或は其似たる所あるが爲めならん、余不肖未だ先生を見ず、たゞ一夜突然の感により、敢て以上の言をなす、妄語の罪、亦實に深大、謹みて先賢に謝せざるを得ず。

言の葉のしげきが下を飛ぶ蝶の
花の果を吸ふよしもがな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

帝國主義

◎帝國主義は、近代の流行である。英吉利でも、亞米利加でも、魯士亞でも、同じ傾向で、遂に、我國に於ても、其の名を飜譯した新政黨が、とう／＼近頃出現した次第である。
◎其主義の宣言する所は別として、實際の希望は、つまり外國に對して內國を一致し、內勢を擴張して、外邦に及ぼさふと云ふ時勢觀から出たのである。維新前、我國の志士が「王政復古、開國進取」の大規摸を唱道したのは即はち同じ主意で、其頃の名義は變つて居たが、恰かも今日に言ふ帝國主義である。
◎一躰、外を氣遣へば自然に內が固まるもので、夜中、泥棒でも這入りかけた時には、仲の悪るい同胞でも、一所になつて心張棒を突張るものだ。追々列國の關係が面倒になつて、何となく風雲の捲き起らんとする氣色を心配する今日ゆへ、何處でも彼處でも、帝國主義と云ふ聲が聞えて來たが、我國今日の帝國黨は、國外に敵をもつて居るのか、國內に敵があるのか、ちと分りにくい所が見へる。
◎シカシ、帝國黨の事は別として、所云ゆる帝國主義なる者の眞の希望は、今日に適切なことである。三千年間の大切なる主君を戴だいて、極くチッポクな船の中に同乘し、風浪天候の險悪なる中に遠洋航海を初めやふとして居り乍ら、兄弟喧嘩は實に馬鹿らしいことである。平家の意氣地なしすら、西海に浮んで居る間は、中々立派の交わりであつた。たゞ四千万位の同胞が一和することの出來ぬと云ふは歎かはしいことで、夫も万國に比類なき國躰を家とし、有がたき主家に万古一日の如く仕へて居る同じ臣民同士ではない乎。
◎君辱かしめらるれば臣死すと古人の言つたは、よく情を穿つた言葉だ。どふして我主君の辱かしめらるるを見て居られる乎。之を見れば、如何に冷血の男女でも、奮然、死を厭わぬに相違ないことで。然るに、我日本は列國の間に相當の敬禮を受けて居るか、どふ乎。戰爭后、世界に知られたなどと云ふはホンノ己惚れで、たゞ知られた位の事はあつても、些しも重きを措かれて居ない。此の人後に落ちて、巾の利かぬ國家を代表するものは、其の代表する人が相應の侮辱を受ける

のである。何人が受けるのである乎、誰が恥を受けるのである乎。世界は比隣の如く、列國は尙ほ家なみの交際の如きものである、況してや、公使も居る、領事も居る、日々の交陟は一刻も間斷ないのである。此の交陟に於て、古來天下第一の尊位に居られた御方をして、幾分なりとも遜節自損の御待遇あらしめる必要は何から起つた乎。我國が小くて、國民が小くて、國家の勢力が小さい柄である。然るに、夫にも構はず、尙ほ內環喧嘩をして、いよ／＼此の小さいものを一層小さくするのである。

◎やゝともすると、島國民と云ふ事を能く人が言ふが、島國民だから、氣象が小さいと云ふ筈は決して無い。英吉利人でも島國民だ。ナポレヲンでも、釋迦でも、極小つぽけな島に生れたものだ。寧ろ島に生れれば領分が廣い筈で、之を狹いと思ふのが、既に小さいからだ。日本人種は決して小人種ではない。昔しでさへ、安部貞任、源賴朝、足利尊氏、大閤秀吉、德川家康の如き偉人が居つた。近代に於ても、南洲の如く、海舟の如き傑物も出た。日本を小さい／＼と云ふは、小さく思ふものが小さくするのだ。

◎夫故、帝國主義と云ふ主義は極面白い主義であるが、此の主義を徒らに小さく實行されると、只だ國內の一致を希ふの餘り、無暗に一致を望んで、合すまじきものをも合しよふとする無理が出來る。魯士亞のヒンランド、亞米利加のヒリッピン位ひ大きくはなくとも、只だ弱小のものを無理に合せて夫で帝國を大きくしたと思ふのは一つの弊である。コンナものは、帝國主義に捲れて、自然に眞の合同融化をするやうにさせねば成らぬ。

◎シカシ、帝國黨の帝國主義は、寧ろあまり小さ過ぎはせぬ乎。之で、外のものを席卷して、一つに合せて仕舞ふとは、ちと覺束なからふ。スルト、之から帝國主義の名は、我國ではちと不評判になる。ソコデ、別に新らしい飜譯字を作るものも出來ようが、何れにしても、飜譯者は面倒なとである。

短篱矮屋板橋西、十畝桑陰接稻畦、
滿眼兒孫滿簷日、飯香晴節午雞香。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

文學

女子心理 笑の文學

（其三）

むしき庵

笑と國民——笑は男女、年齢、時所位等によりて各々差別ありとすれば、國民別として又之を究め得べし。而して之を究めんとせば。其國の文學技術に由るを以て最も便となす。國民總躰は抑も如何なる笑ひを爲すかは、實に其國の代表たる文學に據らざるべからず。こは個人の心理より推して民族の心理を知るの一法なり。惟ふに國内騷擾して一日の安きを得ざる時代と富國强兵蒼生皷腹する時代とは、民族の精神の同一狀態に非るは言を俟たずして明なり。亡國の民の笑は娛樂の笑ひに非ず、興國の民の笑は絕望の笑ひに非ず、又寡默沈鬱の民族の笑ひは駄洒落笑ひに非るや明けし。是等の消息は凡て文學技術風俗其他民族の思想發達の歷史に徵して、其理を知るに難からざるを信ず。

笑と文學——凡そ快活なる人は、感情自然に出で、其間特更に修飾する所なし、君子英雄の本領は第一に天眞爛熳なるを要す、快活なる人は能く笑ひ又能く悲むことを爲す、大に笑ふことを得ざる人は、大に悲むことを得ざる人なり、悲絕は快絕と相隣りす。輕卒に悲むもの未だ悲絕の美を味ひ得ずして苦む側に屬するものと云ふべし、而かも感情の急激に陷るは、概して其精神發達の幼稚なるを示すものなり。

今之れを戯曲に見るに、笑の側に屬する滑稽物には、優美の滑稽あれば、嚴格の滑稽あり、樂劇あれば笑劇あり、又滑稽劇にも笑戯のものあり、餘哀のものあり、悲壯のものあり、我文學に之を徵するに、眞個に滑稽として上乘なるもの從來甚だ少數なるを見る、笑戯は之れあり、悲壯の滑稽劇は未だし、優美の滑稽多少は見出し得べし、嚴格の滑稽に至りては容易に見ること能はず、蓋し文學は國民思想の反影に過ぎざれば、是等の笑的文學に欠乏するは正しく國民の笑ひの性質を示すものと云ふべし。概して我國民は摸倣的にして創思的に非ず輕快にして沈鬱に非ず、故に痛快なることなくして可笑しきこと多く、飽き易きこと多くして執拗なること少し、從つて其文學に

現はれたる笑ひには、大嘲笑、大冷笑、大狂笑なく、僅かに野卑なる滑稽笑、盜笑、苦笑あるのみ。見よ、萬葉古今以後の歌集の如何に笑ひの分子に欠乏するかを、小說戲曲の如きも亦然り、德川時代、十返舍一九を始め多少の滑稽作者なきに非ず、足利時代の狂言類の可笑しきものなきに非ず、而も之を讀み之を聞きて未だ滑稽の美を感ぜしむるものなきに非ずや、彼等は餘りに輕佻なり、駄洒落風なり、淺薄なり。近松の世話物は涙の文學として優秀なり、悲哀の消息、破戀の狀態は大に學ふとを得べし、其笑ひに至つては彼れ殆んど全く之を描かざりしと云つて可なり。概して之を云へば日本には笑の文學の發達幼稚にして涙の文學割合に能く發達せしなり。而かも其涙も大悲絕に非ず、先年來、滑稽物の產出を促すの聲ありしが、未だ見るべきものなきは、畢竟國民の思想の性質の然らしむる所に非ざる乎、噫、詩人は造るべからず生るゝものなり。

其何が故に國民は笑の文學を出さざるかは、前已に述べたる如く國民の思想の性質より來れりと斷ずべし、涙の文學ありて笑の文學なきは、之れ大文學なきの證なり。さらば如何にして之を出すべき乎は須要の研究物なれども、別問題に屬するを以て且らく之を略せん。

女學心理 恥の文學（其二）

仝人

「恥かしい」とは如何なる者にや、恥かしいとは彼の恥辱とは大に異なり、恥辱は通例大失策、又は悔蔑せられたる場合に起る所にして、恥かしいの大なるものと云ふべき乎。

斯に恥かしいと云ふは、最も輕き意義にして、恥辱にまで至らざるものとす、普通の例に徵すれば、

恥かしい情――自動的なり。自から恥かしと思ふを云ふ

恥辱――は受動的たり、他より辱めらるゝ場合を云ふ

されば、恥辱は滿座の前に於て、己れの欠點、不德、失策等を擧げられたる場合等に云ふとにして、此恥辱を受くれば、所謂恥を濺ぐと稱して、憤怒、怨恨となり、之を報わずんば止まざらんとす、其甚しきに至れば仇討となり、殺人となり戰爭となりて現はる、辱めらるゝ所の恥辱の變化する所、夫

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

れ斯の如し。

「恥かしい」には、淺深多少の別あるも、前の恥辱とは大に其趣きを異にす、恥辱は多く同性の間に現はれ恥かしき情は異性の間に現はる、恥辱は殺氣を帶び、恥かしきには之れを包むと少なし、恥辱は少壯の年齢に出會ふと多く恥かしきは妙齢の子女間に發し易し。幼稚なる子女には此情極めて薄く、五六才後より三十前後まで多きが如し。

一、多數人集會せる時、其前を通行する折に恥かしきことあり。之れ己れ特り滿座の目を惹き視點の中心となりて、見らるゝとの餘り面白きとに非るより來るが如し。殊に男子のみの會集に一二人の婦人、又女子のみの會衆に一二人の男子なる塲合殊に恥かしきこと多し。

一、何か失策して恥かしきことあり知りたる風にて言ひ出し實は全く齟齬せる折、詰り出過ぎたる時に於て之れあり。之れ己れの失策の多衆に悟られ、嘲笑の種とならんとするを恐るゝが爲めなり、出過ぎものゝ屢々經驗する所とす。

一、妙齢の異性間には特に恥かしきとあり、女は涙の動物たり、笑の動物たりとは己に述べたり、余は更らに恥の動物なりと云はんとす、女にして恥かしみを帶びざるは殆んど不徳なるが如く厭味を與へ、後ち恐怖心を起さしむるものなり。女にして恥味なきは愛情なきなり、女德に欠くる所あるなり。人を惹くの能力を欠きたる莫連者たり。藝妓は娼妓より恥味多し、之れ愛せらるゝと多き一因なり、素人の女子に至りては病的、狂的に非る限り何人と雖も恥味を有せさるはなし、殊に婦人同志の間には恥味を感ぜざるものも男子の前には之を感ず、男子も亦然り、男子同志間には何等の恥かしみを覺へさる者も、女子の前には恥かし、斯の如く異性間に容易すく恥かしみを感ずるは、畢竟、男女の間には一種の情の存すると、習慣上之を近接するを不可となせると、異性に見らるゝとの一種嬉れしく又厭味を生ずると其他あり。（此項未完）

秘法傳授 佳人七ツ道具

（鬼面百相……其九）

青柳有美

編者曰く、有美君の傳授は、外之を熱揚して、内之を冷却す。其勸むるが如きものは實は其制むる所ろなり。君熱血

慷慨の氣を以て、痛罵の下、慈眼を潤ほす。讀者仔細に眞消息を掬すれば可なり。女學雜誌の讀者には、あまり眞面目にして正直の御方多ければ、試みに一辭を添えて紹介するもの也。乞ふ其の老婆らしきを笑へ。

辨慶は、かの怪しき七ッ道具以て、むくつけき武者嚇せしか、但しは又、疱瘡黒死病虎列刺など、疫病除けのお禁呪にせしか。之れを知るもの、今の世に絶えて無けれど、佳人の七ッ道具のみは亦格別にて、有髯男子の膓を碎んためなり。文明の學問てふもの修めて、何が何か譯のわからぬ洋語など操り給ひ、さては板額、巴など勇しき方にはあらで、黄疸とやらヒポコンデルとやら、聞くのみにても骨の折るゝ病に、顔色青ざめ、吹けば飛ばなんほどなる至りて手弱き姫達の、臆面もなく、かゝる武器を、自由自在に處狹しと揮りまわしたまふ健氣さよ。誠に物すごきまで悽まじ。女の髮すぢにて繰れる綱には、亞利弗加産の大象さへ、よくつなぎ得らるゝといへば、この研ぎすまして揮り廻はされたる七ッ道具の鋒先には、如何の男子か、えて手向かはるべき。降を軍門に乞ふて其配下に屬せんより、外に道なからんか。げに、今時の姫君こそ、昔の武藏坊にも、其腕の凄さは、おさ／＼劣らざれ。いざしばし手並勝るゝ佳人の武器庫に入りて、その七ッ道具となん稱ぶ恐しき責め道具の數かず調べて、世に初心なる殿原達に示さん。之を防ぐ自らなる工夫も出で來ぬべし。又、人の心知らぬ罪なき乙女達も、よく之に心してあやかれよといふ。

第一は 香水 なり

芳しき香水のにほひ、先づプンと來りて鼻を衝けば、恰かも敵の騎兵に、我が前衛を踏み荒らされたるが如し。故に昔よりの佳人も、心がけ此處にありて、蘭麝名香のかほりを、その衣に焚きしめしとこそおぼゆれ。されど、こはたゞ騎兵の働らきをなし、後より操つる手管のために、荒ごなしして、餘地を作り置くに止れば、その香のみにて、男子の心を、全たく手のうちにとろかさんは、素より難し。さはいへ、菫花ローズのゆかしき薫など、姿妙えなる佳人とすれ違ひに嗅げば、何となく胸のうち騷がしくときめき來りて、長く忘れられぬ心地のせらるゝものなれ。又た例のショウペンハウエル

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は、人の心にとまれる記憶の、忽ちに復現せらるゝこと、多くは、前後臭ひの相等しきを嗅ぐより來るといへば、我が香水の馥郁たるに醉へる男は、之れに似たる薫りする每に、末長く、その女を思ひ起すに至るべし。されば、遇ふほどの男を釣り見んとの心懸けある姬たちは、苟にも此武器、肌身より離すべからず。殊に篤志もあらば、書箋端書などにも、我れのと同じ香ひのもの、ふりかけ置くべし。蠑の黑燒よりは、功能あるものなり。されど、また春夏秋冬四期折々の時節に從がひ、その用ふところ、種々異ならざるべからず。色に暖色寒色のけぢめあるごとく、香にも又た暖かき香と寒き香との二つあれば、凡て夏向きには、ラヴエンダー香水或ひはフロリダ香水の如く、亞爾個保兒分の多量にして、涼しき薰あるをよしとし、冬の寒き時ならば、ヘリオトロープ香水、ヴアイオレット香水、千花香水などの如く苦扁桃油を混じたる暖き香あるを用ふべし、而して、春秋の兩季には、兩者の間とも見るべきホワイト。ローズ香水、オー。ド。コロンニユ香水などよろしからんか。一騎當千の武者たらんものは、この邊の、、、かけひきに精通すべきなれ。

第二は　**眼づかひ**　なり

とは、誰人もよくいふ如く、七ツ道具のうちにも、最も主要なるものにて、男を殺すに、なくてならぬ武器なれ、未だこの眼を使ふに巧みならずば、如何に其見目美はしく智慧勝ぐれ、すべての奧義と諸々の學術に達し、古聖を凌ぐほどの德ありとも、殿を手中に溶さんことは難し。されば先づ、すべて我が氣に入りたらん男といふものに出遇はゞ、道の上にても將た家のうちにても、まづ早く秋波といふを瞼の邊りに漂はせて、笑むが如く笑まざるが如く、無言無聲のうちに、その男の眼を視、直にまた元の素知らぬ顏に還りて、物にても言ひ始むるなり。忘れても、この秋波といふもの、長く續くべからず、たゞ〳〵束の間の早術と知れ。罪作りながら、ちと當の男を逆上せさせてやらんと匠まば、少しばかり顏を斜に向け、眼の球も其人の方に寄せ動し、しかも視力のみは、全く之れと反對なる、眼球の横軸に四十五度の角度をなせる方向にそゝぎて、稍々上を睨らめ、充分の思ひ入れを見すべし。氣の早き男など、自惚根性に驅らるゝと請合なり。ま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たゞかゝる男と別るゝ時など、左程にもあらぬに、さも〴〵名殘り惜しそふな馬鹿眞似して、こと〴〵しげにふり顧り、例の微笑を、男の眸に送り込むべし、又男の色々と話しかけ來る時など、折々恥しげなる顏をあげて、その眼を見、事珍しげにほゝゑむなり。

第三は　書信　なり

手に入れて、弄り見んとする男のあらば、少しは不仕附がましけれど、これに書信を送るなり。如何に『脂かける』ためなりとて、まさか昔の御殿息女の戀の如く、とッつきより『御身戀ひしや』とも書きがたく、又かくすれば、女の愼みといふもの破りしとて、譏られなどし、却て事を破るの恐れあれば、たゞ譯もなく、風景のこと戯作者のことなぞ、樣々と書き綴り許し並ぶる間に、それとはなしに『なつかしき』『慕はしき』『戀しき』『愛する』などいふ文字、思はせぶりにタップリと其處此處に挿さみて、つまらぬ手紙の片端にも、必らず少し小さ目に『御讀み被下候や否や、何卒御火中被下度候』など〻書き添へ、充分に『縒をかくる』なり。且つは所々に『……あなた……悲しくッて……困ッて居ります…………』なぞ、甘ッたるき俗語の文を入れ置くべし。これにて、男どもの『御座る』こと妙至極なり。

第四は　贈物　なり

また功能あるは、手製の贈物なり。毛絲の靴下ラム・プ敷シャッ肱かけ、或は絹絲にて編める弗入巾着チックタイ又紙折など、心を込め、郎君のため態々作りあげたらん如く言ひなして贈るべし。若し手づから作ることのうるさくて面倒ならば、事更に何も其勞を自らするにも及ばず、出來合ひものを勸工場あたりより安く購ひ來りて、手製の如く誤魔化し粧ひ、之を贈り與へて毫も差支なし。知らぬ佛の殿たちは、その似せものにさへ、隨喜の涙うち流して『彼女は仲々親切だ。よく僕のことを思つてくれる』など〻、怪しくもホク〴〵悦び給ひ、敵の御大將が首にても得られたらん時の如く、來るごとの友達なぞに、之を誇り氣に示し給ふに至るべし。殊には、ショウペンハウエルが『香氣記臆復現論』もあると故、我常に用ひ居る持物に、我のと同香水の薫り少し帶ばせて、男に與へ、遣な

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

どせば、男は魔醉劑にても飮ませられたらん如く、有頂天のグタ〱となりて、絶えず女を夢るまでに「參ゐる」べし。

第五は　鼻聲なり

これは、男子の憐れみを買はんとする時に用ゐるものにて、シチ六ケしく、彼れ是れと責めたてられなどし、或は心のうち何となく淋しくなり來りて、同情を打ち込み貰ひたしなど思ふ時、猶豫なく用ふるをよしとす。その法は、まづ、凡て言葉の末すゑを鼻にかけ、怪しげなる響きさせて、時々は「フン……フム」といふ間投詞を、其間に挾むにあり。且つは終始なだれかゝり、寄りかゝる心持ちを忘るべからず。假令ば『フム……だッて』でも……何々さんが『フンフム……わたしは出來ませんもの……フム』などの如し且つ、少しは眼も曇らせて、泣きそうな態を粧ふなり。大抵の男子ならば、それに鼻毛を伸ばして、悪くからぬ思ひの、いや增しに增し加はるものぞ。

第六は　ハンケチなり

これも又、あわれを買ふの道具にて、用法は大畧三つあり。一つは、其一端を齒の間に咬え、筋違ひの一端を指につまんで、引ッぱるなり。但し、眼は稍々癇走りて張るをよしとすこれは、幾分か恨みの意味を宿す時なれど、若し充分にあわれの心持ちを現はさんとならば、咬えたるまゝ恥しげに少し頭を垂れ、何度となく、手にてゆる〱ソッと、そのハンケチを上より下にこきおろし、折々は『フン……フム』の鼻聲をも混ゆるなり。この時。用なき片手は、力なげに疊の上につくなり。今一つは、クチヤ〱にせるハンケチを、下向きながら『手持ち無沙汰らしく膝の上にて『お手球にとるなり。かゝる樣見せなば、五尺の堂々たる男子先生も『どうも可愛そうだ』などゝ、いらぬ義俠心をふり起して頸ッたけはまるに至ること、千萬請合ひなり。すべて男を誤魔化しだます位は、難きことに非ずと知れ。

第七は　扇なり

花の都は巴里の才女、マダム、ステエルの言葉に、この武器を巧に揮ふに至らずば、未だ手取りとは、言ひ難しと。これ

も多くは、男子の憐れみを買ふに用ふる武器なれど、時には肱鐵砲の代りに用ひらるゝことあり。されば、黒き眸せるイスパニヤの處女どもは、之を右左に動かすうちに、當の男に我が心のあるなしに通はせ、頸筋の硬ばりてすまし勝ちなる亞米利加の女さへ、之を靜々と動かし遊びて、其お轉婆根性を取り繕ふとかや。されば、凡て手に扇持てる佳人のあらば我が命取る彈丸の、聲すさまじく其影より飛び來ると心得ざるべからず。また、佳人もし虫の好かぬ男に、何か言寄らるゝことありて、物うるさしと思はゞ、先づ小形に扇開きて、その言葉開き流しながら、少し早や目に動かすべし。必ずや糠殼の如く、吹き除くるを得ん。次に男子の憐みを得んとならば、まづ其扇を眞一文字に閉ぢて、下唇の邊り一寸輕く銜きて、その扇を杖に少し頭を垂れて見するなり。また凡て扇の使ひ方早や過ぎるは、性急の人にて、その緩かなるは、心落ちつける族なりと知るべし。

（完）

欲レ問二興亡意一、　重城迫二古堅一。
百年豪傑盡、　擾々見二魚蝦一。

雑録

海舟先生逸話（一）

◎昨日あたりの中央新聞を見ると、伊藤サンの元氣は大へんなものですが、元と伊藤サンの勝サンを慕つて、尊敬して居られたと云ふとは、大へんなもので、黒田サンでも、松方サンでも、ミナ夫は恐れ入つたものでした。

◎伊藤サンが、大垣の奥サンをくどいて、はだしで逃げ出したと云ふときに、黒田サンが大邊に怒つて、天子に上奏すると言つて、丁度勝サンの所に來て居られた時に、私も行つて居ました。スルト、勝サンが『黒田サン、およしよ、伊藤がやめたら、誰がやるエ』と云ふ問で。黒田サンが『夫は私がやります、伊藤だけの事は、出來ます』と云ふ勢ひでした。『ソレ、御覽ナ、伊藤だけの事をするのに、やつとジヤアない乎、段々人が無なつて、天子様はをさみしいのだから、ソンナ事はをよしよ、夫より、伊藤はコレ丈け愼しめば善いのだよ』

と言つて、卷紙に何だか、サラ〳〵と書いて出されました。スルト、黒田サンヮ、コウ頂だいて見られました。手から手へですから、何が書いてあつたか知りません。『伊藤サンは夫を愼しみ、アナタは夫を守りなされば善い』と云ふとでした。所が、黒田サンが『ハヽヽ、眞にそうです、確かに私が助けて守らせます』と云ふとで。夫れで、一番の反對家が反つて伊藤サンを助けると云ふとになりました。

◎其時、伊藤サンは夏島に居られましたが、夫は勝サンが置てをきなすつたのでした樣です。丁度、日本銀行で、富田と松方とが衝突した時でしたから、私が勝サンの所へ行つて、『今ま富田をやめさせては、實に國家の不利だから、あなたが伊藤に會つて、とめるやうにして下さい』と言つたら、『己は夏島にゆけぬよ、今まあそこに置てあるのだから。己が行つたなど〻云ふと大變になるから』と云ふとで、夫から、私が勝サンの手紙を持て行きました。スルト、伊藤サンが、コウ頂だいて、開 て見て、『どふか、先生にそう言つて下さい、此事はたしかに まとめ升から』と云ふとで、夫で、ワザワザ二度出て來てまとめたのです。

◎其后、伊藤サンが宅の方へ來て、『どうか勝サンに會いたいと云ふとで、夫から、勝サンに行つて話すと、會わうと云ふとで、來らしたのです。伊藤サンの方では、禮のつもりでせうが、其時、勝サンの話しに、『黒田が余程、總理になりたがつてる樣だよ。薩摩は妬心が強くて、辛棒づよいから、一度心をかけると、仲々止めないよ。早く、黒田にをさせよ』と云ふとで、夫から、伊藤サンが總理をやめて、樞密の議長になつて、黒田サンが代つたのです。

◎外の時でした、伊藤サンが國會を開くと云ふ時です、矢張り、勝サンから、ひどく言はれました。『お前方はどこ迄うぬぼれて居るのだエ。國會は、大久保、木戸、西郷や、私の相談で、明治三十一年に開くつもりだつたよ。明治政府は、初め十年が亂暴で、中十年は利學をす〻め、あと十年に穴を埋めて、夫から國會は、私等には、適せぬから、后の人才にやらせると云ふつもりであつたのだよ。夫に、お前方は、今から開いて、穴だらけの不始末を、七八百人に見せて、流言されて善いのか。ふだん、ヲベッカを言ふものの言葉ばかりを聞てると、ソウなるものだ』と、ひどく言はれました。伊藤サ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ンは、御尤ですが、もふコウしまして、致方がありませんからと云ふとで。

◎夫は、伊藤サンでも、黒田サンでも、そうでした。『伊藤サン』と言はれると、手をついてコウですから、『黒田サン』と言はれても、又たきに、手をついて、コウデス。（以上六項某氏談話。禁ニ轉載一）。

◉之は、事實の話で、まだ公にならんとですが、英照皇太后の御大葬の時、內閣に大葬使を置くと云ふ論と、宮內省でやると云ふ論と、二つに分れたので、高橋健三や吾々は、從來、內閣でしたもので、即ち國家が之をお送り申すと云ふ主意によつたのであるからと、沿革歷史に據つて主張したが、反對論も又色々あつて片付かなかつた。夫で、樞密院に御下問になると云ふとになつた所が、松方サンが私を呼んで、明日、いよ〳〵樞密院で、其の評議がある筈だが、外の人は兎に角、勝サンは是非出て頂かねば成らず、其譯を申して置かねば成らぬから、お前一ッ行てくれろと云ふとで、朝極早く行きました。大雪の降つた日でしたから、車はあとから來いと言つて、極早く、長靴をはいて行つたが、何と言樣が無いから、「餘り雪の善いので、雪見に參りました。お休みでせうからお起になる迄、コヽデ見て居り升」と言ふと。モウ、お目ざめですと云ふとであつたが、「イヤ、お起になる迄、コヽデ宜い」と言つて待つて居ると、先生がカイマキを着たまゝ玄關へ出て來られて、『ドウダエ、マアお上りよ』と云ふので、上ると、『火を澤山もつて來い』などと餘程の御機嫌で、大層歡迎されたが、既に先生はチヤント來た用事を察して居られる鹽梅なのだネ。ソレデモ、こちらから申出し惡くて居ると、先生の方から、話が出た。コチラは善い鹽梅だと思つて、樞密からお使が參りましたかと聞くと、『ソウヨ、昨夜だか、今朝だか來たようだが、アレは一躰どふ云ふ譯なのだ』と問はれたから、こまかく双方の主張する所をお話した。其日は中々の厚遇で、マア、娘のムコか、そうでもあるまい、孫娘のムコ位が雪見に來たと云ふ調子だつた。汁の温かいのや、いろ〳〵ぢきに出て、どふもアヽ云ふ迅速なとは、よく調つて居たものですナ。非常の御機嫌サ。イヽ工合だと思つて、「そう云ふ譯ですから、是非、先生に出て頂きたいのです」と云ふと、『ソウかへ、それなら出ませう』と云ふとで、安心して歸つた

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

のです。

●スルト、果して樞密へ出られた處が、松方サンも出られたが、內閣へ歸つて來て、「今日は、勝サンが、妙なことを言つたよ」と大へん不機嫌サ。其うら、勝サンが、やつて來られて、松方サンに對して言はれるに、『內閣では子ー、此からいろ〳〵爲ねばならぬとがあるのだから子、アンナ事は、宮內省の方で爲樣と言へば、させて置く方がいゝよ、少しの事で衝突などをして御覽ナ、之からサキ、爲すべき事も自然出來なくなるジヤアないか』と云ふとで、ソレは飛びはなれたお話で、驚いて仕舞つた。『ソレニ子、樞密でソウ極まつたのなら、負ジヤアあるまい、エ、エ』と言はれるのサ。

●其後、ゆくと、コナイダの事は分つたか〳〵と云ふ工合で、丸で、禪僧が、解し得たりやと云ふ問答の調子サ。(右三項某君談話、禁ニ轉載ニ)。

某先生の慷慨談をきゝて

若い衆は面白そうにぼん踴　　海舟

十三年振りにめぐり會ひし

婦人に贈れる書

(その一)

無名氏

先日は十三年振りにて御目に掛り、小生の喜び之に過ぐるものなく候。御身の御一家も絕えず小生を御思ひ被下し由なるが、小生がひとり心に昔の冷淡を悔ゐ、何時か御面會の上お詫申さんと思ひ居りし事は、言辭を以て申上げ難き程に候長きを厭はず申上げ候はゞ、小生が國を出て大阪に來り、或英學校に入りてより、學問に熱中するあまり、故鄉の事をさへ思ひ出すを潔しとせざる變人と化し、御家に對しても音信申すとを怠り、小生の家が上京するに就き、一度歸國せし時も、小生が先祖の墓參に行く途中にて、御身の母上に呼止められ、漸く御家に御立寄り申せしも、母上の御親切を無愛想に御受け申し、二三の言葉を交せし計にて、御いとま申せし事、御兩親も御不審に思はれしならんが、小生は後に至り、此時の事を思ひ出す度毎に、何となく濟まぬ心地いたし、年月を經るに從ひ、世の有樣を解し來るに就けても、忘れ難く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

わが身を責むる事一層増り申候。小生が御家に御立寄り申せし時、御身は姉上と御一緒に播州へ養蠶に行かれて、御留守の由承はり候。
其後小生一家は東京に住まふ事となり、小生は又奥州へ參り居りしことも有之候が、學問の難關をくゞり、且、浮世のはかなきを悟るに就けても、忘られぬは御身一家の事にして、何處に如何に暮さるゝとやら、何時御目に掛らるゝとやらと、空く思をめぐらす事が、或は悲き歌となり、詩となりて、小生の詩想を發達せしこと幾干なるか知れ申さず候。丁度今日より五年前の夏、二個月の休みを幸に、こちらの方へ參りしこと有之候が、其節播州の龍野にて、某といへる人より、御身を汽車の上にて御見受け申せしが、大阪にて看護婦を爲し居らるゝ由承り、歸途大阪に立寄り、諸所の病院を尋ね候處、先日とは違ひ、尋ね方の惡かりし爲め、分らずに終り候。其後に、當地大津にも來り、三井寺に上り、湖水に向ひ、御身一家の事を案じ居り候ところを、撞き出す夕暮の鐘に驚かされて、また無常の旅をつゞけ候こと有之候が、此度の如く、御身を御連れ申し、再び此處に參ることありとは、夢にだも期し居らざりしことに候。誠に奇遇の上の奇遇に可有之候。
一昔相會はず候て、一朝再會の機を得しものも、御身御一家の以前と變らぬ御親切により、昨日の如き思を爲し、國に在りし日、御一緒に英學に通ひ、又共に嫁菜たんぽゝ等を摘みて遊びし事を思ひ出で、何となく稚き時が戀しく相成候。すべて無邪氣の時が最もよろしく候。世間に出づれば、艱難辛苦は人の前後にまとひ付き、恰も旅人が山又山を踏み越えねばならぬ如く、浮世は險しき坂のみ多く、一の難事を越ゆれば、又他の苦勞を生じ、樂を得るなどとは到底あるまじきことに候。然れば之に對する覺悟は、おのれの心一つにこれ有るべく候。こゝろ卑ければ、樂と思ふとも眞のものに非ず、こゝろ高ければ、苦き中にも自然の樂み有之候。御身の如きは、世に不幸に相見え候へども、男子にても時には爲し得ざる事を、女の腕に引受け、如何に亡き父上との約束ありとは申せ、一家を支へ居らるゝ事、誠に感心の至に存じ奉り候。之を仕合せと思ひて、一層御孝行成さるべく候。
たゞ殘念なるは、父上の御死目に遇ふ事を得ざりしことに候。今更らくやみても及ばぬとなれば、先日御話申上げ候通り、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

御石塔建立の御助けなと致す心得に候。

父上は御逝去遊ばされ、母上とても既に御老年に及び、且、兄上の御病氣不斷の事なれば、御心配は然ることながら、こゝが女の一念の通る所に有之候。誠は即ち女の力に有之候。いやと思ひて爲せしとは、如何に辛苦を積むとも、無益に歸し可申候。御身が今日の責任を全ふするは、たゞ眞心を以て萬事を忍ぶ事に有之候。誠ある者の苦みは決して苦みに非ざるべく候。小生は只今では妻子もある身に候へども、昔の事を思へば、見失ひし姉妹を得たる心地致し候に付、出來るよならば、何處までも御力に相成申すべく候。既に住所も知れし間なれば、時々は御手紙被下度候。

終に申上げたき事は、すべて醫に關する人は、その研究する所、また接する所、殆ど身躰の事ばかりにて、兎角高尚なる事に思ひ及ばぬ勝なれば、醫の事を知れば凡ての事足れりとする、一般の惡風に染まらず、何卒女としての品性を發達するよう御心がけ成さるべく候。

（その二）

御手紙拜見仕候。兄上樣よりも御音信これあり候。如何なる事情かは存じ申さず候へども、御身御歸阪の翌日、御老母樣まで急に御歸鄉遊ばされては、時々御見舞申さんと思ひ居りし小生は、少し失望仕候。今後御地に參らば、必ず先御身の病院を御尋ね申すべく候。今日の土曜日は御地行と兼て定め居り候故、友人にも通知いたし置き候處、古き同窓五六名小生を待ち居るとの返事これあり候へども、不圖石山の螢見を思ひ付き、家族並に其他の婦人と之に參り、只今歸宅せし次第に候。御身をも御招き申せばよろしかりしとは存候へども、何分遠方でもあり、勤も御座ることなれば、如何かと存じ、遠慮致し候。明日も亦同所へ參る筈なれど、之は同僚の者の御つき合許りに候。

世の中といふものはうるさきものにて、つまらぬ者にもいやな顏は向けられず、おのれの躰も亦隨分思はぬ心配の出で來るものなれば、いつそ山の奧へでも這入り、一人で住まひたく思ふときゝ有之候へども、又一方より考ふれば、人と生れて人たるの道を盡すには、山に入るも、世間に在るも、變

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

りし所あるに非ざれば、此點よりして我々の慰はこれあるべく候。苦みの境界を過越されたる御身に取りては、浮世にあき果てしと仰せらるゝも御尤のことに候へども、かゝる人は澤山有之、小生とても、今日に至るまで滿足を覺えしとは無之、又これまでの經驗と悟り得たる所とによりて見るも、樂を得んとする考は露これ無く候。世間の人は飲食虚榮を以て目前の喜を買ひ、殆ど悲き風の吹く處あるを知らぬ樣なれど、斯の如き人は決して永續する滿足を得たる者とはいひ難く候。第一、人の生命に限ありて、死ぬるといふは、たとへば酒の醉の醒る樣なものにて、さめた時が眞の人間の有樣なれば、始よりこの眞の人間即ち死ぬる後の心持となりて、常に空き迷を遠ざけ、後生の大事を圖るがよろしからず候や。以上の考へを以て御坐るならば、世に在るも、世を去るも、殘れる心は同じものにて、苦き中を通るも苦みと思はず、樂き事に遇ふとも、眞のものに非ざれば、之に迷はされず、務むべきは務め、盡すべきは盡し、一心の誠を貫き玉はゞ、之が何よりの滿足にこれあるべく候。よし我々にしても、人の知らぬ悲みありとすれば、その悲みを悲み通すも、亦一つの滿足に候はずや。樂を得たしとは人の爲せることをうらやむに過ぎず、人をうらやむ心なければ、また浮世にあき果てしといふこともあるまじきかと存ぜられ候。

父上の御逝去は最も御身の御力落しの原因と御察し申候。然りながら、以上申上げし事を能く御含み成され候はゞ、現在既に父上の所に御坐るなり。人の心は決して亡ぶるものにあらざれば、その亡びざる心と心と一致する所には、過去と未來の區別なく、失せにし人も世の人と交はり、世にある人も亡き人と相語ることを得申すべく候。心には、人の口より出づる樣な聲なきと同じく、之を滿足させるものも亦目に見ゆる世間のものにはこれ有るまじく候。今夕琵琶湖に乘り出せし時、一匹の蜻蛉の湖上を渡りなやみて水中に溺れ居るもの有之候故、櫂をのべて之をすくひ上げしに、暫くしてその力を回復せしと見え、再び高く飛び去り申候。人のなやめるを、櫂ともなりて救ひくるゝものは、たゞ神の力なりと存ぜられ候。

失望は人の元氣を害ひ、人の心を弱くするものなれば、從つて萬事太儀になる樣なもの故、何卒以上小生が申上げしと

を御服膺被下、御氣を御持直し成さるべく候。いづれ來土曜日には、また御地へ參る用事これあり候に付、御目にかゝり可申候。

いかづち物語

久保ゐの吉

（其四）

雷は神の中にてもおそろしき神として照臨せりき。まことに賞罰その當を失はざりしは私史野乘にも散見せり。北野緣起の中に菅公薨去の後のさまを寫せるあり。

『その後やがて雷電霹靂して、世の中くれふたがりて、いかづちの聲に、多くの人膽心を碎きて死に迷ひけり。清涼殿のうちには、本院のおとゞひとなり太刀を拔きて朝に仕へ玉ひしに「わが次にこそおはせしか。神になり玉ふとも、などか我に心おき給はざらむ」とて立ち出で玉ひけり。かくて、御門おそれ思食て法性房僧正のもとへ宣旨三度迄下りしかば、參り玉ひしに「鴨川の洪水のきて陸地の如く成りて」とおり玉ひしこそ法驗もめでたく王位もおそろしく侍りしか。斯くてやう／＼にこしちへ

奉りて、しばしは靜まり玉ひしかども、つひには叶はざりけり、延喜八年十月の頃にや、菅根卿はあらたにけころされにけり。同九年三月に本院のおとゞなやみ玉ふ。さま／＼の御いのりも驗なし。耆域が方藥なれども驗なし。安賀二家の秘術徒らに祭物を費す。春日大明神もすて玉ひけるかとぞおぼへ玉ひける。されば菅丞相の御靈仇なりとさとりぬ。

と誠にさるべき理あり。又日本外史新田氏に

……義興瞋レ眼曰。悔レ陷ニ豎子計一割レ腹死。時正平十三年十月也、基氏重ニ賞二人一。堯寬赴邑。途由矢口。天俄雷雨。顧覩義興追己。墮馬。疾作。死。鎌倉人亦夢義興來襲也。矢口氏立祠祀義興……

とあり。之も悪臣を誅して謬らずといふべし。又新井の鬼子母神に緣日の時行く人は必ずや見む。日蓮上人が片瀬の龍口寺にて斬られむとする時、雷電急におこり、今や頭上におちむとせる白刄三つに折れきとの人形あるを。天下の英雄とをしみての雷神のしわざなるべし。かしこしともかしこし。人或はいはむ。それは精神上病的の働きなりと。又た曰む、それは

偶然の事なりと。予はその病的なると偶然の事なるとをとはず、それが事實として信仰せられし時代には事實と見なす事を退けえず。又神が天上より折々手を下し玉ひきと思想するの趣味あるをやめがたし。

徒然草かきけむ法師のいひたる如く煩腦の增長は底止するところをしらず。ラビリントの道しるべをせむとする人あり。神の寶庫を開かむ鍵を作らむとする人あり。神はいよ〳〵我々を導き玉ひし手綱をすてゝかくれ玉ひぬ。直接に賞罰を行ひ給ひえぬほど遠かり行きぬ。シルレルがいひけむ如く、霧はいよ〳〵はれ行きて、神々はその霧とゝもに遠かり、瞟渺模糊の裏にかくれむとす。黄口の兒もよく雷神の淸水に尿して省みず。神の鳴る日に臍をかくさぬ穉兒もあり。

あはれ、さばかりおどろ〳〵しう鳴りわたりける鳴神も今は學校の兒童も陰陽二電氣の合するに過ぎず。雲には陽(積極)電氣あり、地面には陰(消極)電氣あり、不良導體の空氣を無理に通過するを以て光を發し音を發す、何の奇かあらむと、のゝしらるゝにいたりぬ。當代の女歌人の口にも

稻妻のかけをとらへて燈火にかふるも御代の光りなりけり

と苦もなく歌はるゝにいたりぬ。かくて雷には威も無く靈も無し。まことにそれにやどりましける神の逃げかくれ玉ひしより蟬のもぬけの如く、唯エーテルの振動なりと決定せらるゝにいたりぬ。

あゝ、森羅萬象に靈を與へ玉ひけむ神々は、全く入りぬ。詩的の世界は逝りぬ。つら〳〵觀ずれば、煩腦の發達せる世界は蓄音器の聲を聞くが如く、活動寫眞の色を見るが如し。あはれ詩的の世界再び來らざるべきか。かの神々を更によびかへす事も能はざるか。予は否と答ふるに躊躇せず。予は未來に於て一層詩的たる世界を迎へ、神々と一層打ちとけうべき理想世界の到達せむ事を期するもの也。一方より見れば、我々は無情にも神々を追ひのけ、その導く手をふりすて、燒石の轉々たる一大球の上に立ち、夢にさめたる如きこゝちあれども、その裏には、神々と更に親密なる連鎖のひそめるを知る。神々の形は打ち碎けて更に萬物にやどり來るを見る。予は飽く迄もエスエルギー不滅則を(Censerbation of Eurgig thirlty D. Ewergie) 信じ、又エスエルギー變衰の則を信ずるもの也。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○靈精の感應

自然に發し、十方に照り、陰微幽玄の限に至るまで、通徹して止まざるは、夫れ人の靈精なるか。感應の必然にして、寫映の明確なると、影の形に添ひ、響の音に應ゆるにも勝れり。同氣相求め、同魂相引く、其間、數万千里を遠しとせず。必らずしも、書信によりてにあらず。必らずしも、相見るによりてにあらず。只だ知らずして而も識らざるに相應じ、忽然として幻影し、亦忽然として電映す、宛がら夢に卒爾として相見るの態の如し。こゝを以て、君子は不遇を怨まず、不遇を信ぜざれば也。戀人は失戀を歎かず、戀思の通ずるヿを信ずれば也。夫れ、屈するものは必らず伸び、欝するものは必らず開く。人もし勢をひを潜めて、深く蓄藏するヿをせんに、遂に其の効を奏せずして止むヿあらんや。歎ずるものは、其忍ぶヿの足らざるに泣け。恨めるものは、其思ふヿの深からざるにかこて。日光の遠く地に射るを日々にながめ、月光の近く露に宿るを夜々に拾ひ乍ら、心裏の明々の必らずや彼に達すべしと信ぜざるは何事ぞ。嗚呼、信仰うすきものよ、其の魂、何んぞ薄弱、其の誠、何んぞ粗雑なる。試ろみに、一志到り、一氣熟せば、天地も小さき蘆の如く、万戸も近き隣の如し。潜思よく竄入し、凝念よく徹底するヿを自覺しつゝ、何をもつて夫れ靈精感應の自在自由なるを疑んとはするや。

○鎭撫の術等々段々あり

山中の賊平らげ易し、心中の賊平らげ難し。平らげ難きものを平らぐるの好將軍は、坐ながらにして能く其の平らげ易きを平らぐるヿを知る。人曰く、重厚の人倘動かずと、故に動かず。これ風を望んで其の動かざるに動かず。正にこれ動かずして能く人の動かんとするを制むるもの、所云ゆる鎭台の實こゝに存す。左れば、周旋奔走して世の治安を維持するものあり、斯の如きは周旋奔走して騒ぐヿをするの徒を鎭むるの術なり。もしくは威服壓倒して世の背叛を挫く者あり、斯の如きは、威力壓制の暴によりて事を成さんずる族を鎭むる

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

の術也。夫れ、忙々焉として騒がしき徒のよく騒ぎたりとも遂に何事か為す。蠻勇暴力の横行する所ろ、究極知るべきのみ。天下の大亂は、未だ決して斯の如きものにはあらざる也。夫れ、重厚の人未だ動かず、誠實の人未だ怒らず、無慾大慈の人未だ起たざる時、世の治安の根柢は依然として存す。左れば、坐がらにして治安の根底を鎮むるの道容易すく知るべし、豈に術數と、策為とにあらんや。人もし其の平らげがたきものを自から平らげ得ば、感應忽ち映ず、世に向つて澄清の効すでに成れり。豈に奈何んぞ特更らに功の名を問ふに及ばんや。坐して天下を制するの道、何んぞ、奇ならん。古人すでに説き去つて陳るし。

○松も亦た友ならずか

蠻人の消息に通ぜざるものは、文明の意義を辨まえず。惡人の心理に精わしからざる者は、善行の主意を覺らず。古今の時同じからずして、理同じく、東西の德異なりて、道等しき所以を知らざるものは、機勢の變轉と、人事の進退とを語りがたし。夫れ、大觀せば、一視同仁のみ。濃やかに思へば、思戀楚々たり。彼の佳人にあくがれて、白骨に吟じ、功業に壯志を起てゝ、朝露に歌ひ、煩惱即わち菩提、墮落即わち救濟の福音に感謝せざるものは、うちあけて迷ひを説き、安んじて秘め事を語り、慷慨に平安を得つゝ微笑して大義を論ぜんは難し。左れど、其人あらざれば、松韻に和せんも亦可なり、何んぞ絶哀悲歌して愁聲を擧げんとはするや。

○毒婦吟

竊盗は憫れむべし、凶盗は親しむべし。巨惡を行つて疑わざりしものは、其心必らず美所あり。紳士と、斷頭臺上の刑人と、その何れか愛すべき。豈に俗士がむげなる淺評を容れんや。丈夫、意氣地なきによりて、家に貞女烈婦の名を為さしむれば、世人乃わち喝采す。限りなきの愛、限りなきの恨、限りなきの熱情をもて、斷乎として決行せば、世人痛罵して、毒婦となす。嗚呼、窈窕たる佳人の涙固より多情、毒婦の涙亦多恨にあらずや。詩人ひとり彼の為に歌つて、此の為に泣かず。嗚咽通ずるとなく、怒髮解けたるはなし。われは、毒婦の心に眠らんとするもの也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○穩健なる成効

世の所云ゆる事業の成効には、持續せる平凡の勤勞を要す。之なかりせば、奇才ありとも必らず敗る。時としては奇才あるによりて彌よ敗る。而して奇才の人、其の所以を覺らず、世上成効の事業の多くは平凡の手によりて成るを見て、輕侮して嘲けるは、寧しろ愚ならずや。夫れ、事業は、俗界の事なり。俗界に下るは、神聖の事なり。高士、志を救濟の爲に立て、身を投じて、俗務に任ぜんとせば、豈に成敗を蔑がしろにして可ならんや。既に成ることを希わば、其の着想の平凡にして、其の勤勞の器械的にあらざれば、不可なる、固より然り。未だ此消息に通ぜざるは、悟らざる耳。

○御心を知る

一枚の木の葉を顯微鏡下に照らして、其網膜の緻密なるを見ば、天網恢々たりとも必らず漏さゞるとを知る。一點の空の星を望遠鏡に照らして、其世界の宏大なるを見ば、人間微々たりとも、必らず達すべきとを知る。夫れ、木の葉すら經綸あり、天の星すら攝理のうちなり。吾等何んぞ天父の管理の御手よりもれんや。

○品格の果し合

盲目の蛇に懼ぢぬは見ざればなり。大馬鹿物をもて天下第一に恐ろしとするは、其の覺らざればなり。もし夫れ尋常以上の識覺あらんものは、相見るに於て互ひに其の品格を鬪はし、未だ舌鋒を交へざるに、早く勝敗を決す。氣の壓する所、如何んともしがたし、智の輝やく所ろ如何んともしがたし、德の照らす所ろ如何んともしがたし、もし夫れ靈の射る所に至ては、夫れはた如何んせんや。氣品は、人品の光なり、品格は、修養の尺度計なり、人それ容易すく如何んせんや。之を鬪かわせて心に恥るものは、須からく常に大に修むべし。

○活ける眞理に吸ふ、樂しひ哉

夏木立、快ちよく繁り、千枝萬葉の綠、相ひ映ずる下より、白金の泉、涼涓、砂を洗らつて流る。美人あり來りて、水を掬せんとし、手を下すをすら攪き濁すと思ひけん、膝を折り

首べを垂れ、朱唇を口つけて直ちに呑む。朱唇、紅かく、淸泉白ろし。水味甘まきと如何んぞや。惟ふに、吾人亦た斯の如くして眞理の泉に口つけせん哉。酌むとなく、掬ぶとなく、我唇をもて直ちに其流れに飲まん哉。

○雜草の美　ゆう、う

殊更らの名なく、一槪に雜草と呼ばれ、茂りて愛顧せらるるとなく、花開きて賞翫するものもなし。但だ厭われて數多たび刈り取られ、卑しまれて斷えず踏まるるのみ。去れど、汝、先づ繁りて土を肥やさずば、美くしき花も、高き樹も、育つまじきに、人の能くその功を思はんものは少なし。われ、熟ら汝の風姿を觀ずるに、其の飾りなく茂りて靑く、惜しげなく伸びて淸く、天眞朴にして質、其の自づからの姿を見せて、誇るとをせず、わざとらしく人の愛を惹んとする邪氣もなきこそ、一入のながめなれ。われは寧ろ汝に與みして、其の淸風と朝露とを味あわん、われは雜草の知己なり。

寄書

日本演劇に於ける伴樂器の性質

巖本露草

古語に曰く、音樂は幻術に似たりと、然り樂音一度響けば、鬼神忽然として斯こに現れ、妖魔又來て相共に狂々醉々舞ふ所を知らず、轉々走々此處に飛び、彼處に行き、手の舞ひ、足の置く術を知らざるが如し、何ぞ樂の靈妙にして奇絕なるや、是に於てか、劇の精神は伴奏(鳴物囃子と云ふ)を得て始めてよく活動し、舞踏の整調又此の伴樂に依りてよく完成す、されば劇の運動に於ける、又舞踏の姿勢に於ける、何ぞ全く之れが奏樂の力、預りて即ち伴奏樂器、大なるを見ん、豈に演劇舞踏に於ける之れが功德偉大なりと云ふ可んや。

余輩今此に少しく日本演劇の伴樂に鑑みて聊か之れが情意發表、風景描想に關する形容及び裝飾樂の一般を記示し、以て諸人の參考に供せん。

◎將に天曇りて、四方に雲氣立ち起らんとするの景を、描き出さんには、小太皷の早擊ち方を奏す。

◎暗澹たる一隅より、幽靈妖怪其他すべて怪しげなるものゝ出で來らんとする時、その物若し妖物なれば、大太皷の早や擊ちを頗る强くなすを法とす。之を大ドロと云ふ。又幽靈などならば、之を弱く擊つものにて、薄ドロと稱せらる。

◎一天、墨を流せるが如くかき曇りて、黑白を辨ち難き闇の夜に、殘忍酷薄なる殺人を遂げんとする時、或は叢の影より忍びでゝ、敵をだまし討ちにせんとする景換言すれば世話狂言忍び出杖の 悲劇實景 の場を演ぜん時且つ最も凄味には、三味線一挺に頗る激烈なる强弱西樂に所謂 Crescendo, Decrescenod を附し、ある趣にて彈くなり。

◎强奪、殺戲、遺恨仇討などのため、多人數取り卷きて、雜沓を極むるを見せんとするには、太皷を烈しく擊ちて、如何にも混亂の情を表出するなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎河の流れ、浪の音其他降雨の夜景など描き示さんには、大太皷の小撃ちを奏するなり。

◎陰々茫々たる天の一方より、怪異の水烟たち上り、忽ちにして地の全面霧に閉されたる姿となり、一寸さきをも辨じ難きまでの物凄き景色と化せる時には、三味線を稍々早や目に彈ずるを以て法とす。

◎華やかなる宮室、其他嚴めしく裝へる官女役人貴人など、總て莊嚴を主とせる殿中の樣など見せんとする時には、太皷、笛、小皷など、うちまぜ至つて緩調に之を奏すとぞ。

◎唐僧などの仙人めける風して現はるゝか、或は支那の狂言に能くある如き金門五三桐高樓の上より、靈に血ぶみを添へて飛ばしやる時などは、笙、篳篥、太皷、樂太皷等を用ひて、何となく唐くさく見するなり。

◎なまめける遊女屋、また待合茶屋などにて、遊び騒ぎ舞ひ狂ふ樣など覧しき場に點するには、重に三味線及太皷の合奏を以てし、間々その間に佃潮來節甚句などの俗唄をさしはさむなり。

◎竹刀勝負か將た角力仇討試合ひの場など勇しき向きのもの、及び、奴丁の打ち水、庭掃除の躰など涼しげに見ゆるものゝ時には、三味線に大皷、小皷など、とり用ふ、之を俗に劇社會の言葉にて白囃子といふ。

◎鳥の聲を聽かするには、(各それ〳〵似寄りたる音の笛あるものなれども、時には他の鳥笛の調子を少く加減せるのみにて、この鳥の音に用ふることもありとぞ。

◎白面九尾の狐が、その正體を見現はされて、天界に雲隱れせんと立ち上る時、或は雷鳴しきりに轟きて天地を振はすなど、凡て物すさまじき場には、樂太皷に早目の小皷を挾み、ドロ〳〵めける奏し方をなす。

◎時代狂言などにある奥御殿、大寺院の方丈本堂等、何となく難有げに拜まるる所を描出するには、樂太皷或は二上りの笛に太皷を交ゆるを法とす。

◎神社祭禮の景、又は社地境內觀せ物興行など、雜沓の場を示さんには、笛、太皷、三味線の三樂器を混用して、所謂『馬鹿囃子』なるものを奏するなり。

◎其他、唄、囃子、神樂、念佛の時など、各相異りたる囃し方のあるものと知るべし、然れども此は別段趣味ある樂奏なきが故に此に之を略す。

時事

○女學校の夏休

夏休は休みの爲ならず、實地研究の爲めなり、女生、學窓を出でて家門に歸る、當に其の庖厨に入り、其の鄕人に交はり、其の古習に學び、實地に活ける學問を爲すべき也。女學普及の術他なし、生ける女學を見めすにあり。生ける女學とは、女學生の一身に存す、此の處ろに於て其美を損すとあらば、如何んぞ空論の言の踊らゝかなるのみ誇るに足らんや。

○內地雜居

果然內地雜居となれり。かねてより主張せし內外人懇親會のいと淸潔靈高なるもの行われ、かの忌々しき內外人の横行せんとするを未然に防げかし。

○本年の米作如何

此頃の天氣もよふ、何となく氣遣ひなり。本年米作の如何にて、當分の禍福決せんか。

○女子獨立學校

加藤とし子を失ひたる女子獨立學校は、獨立雜誌の主筆、內村鑑三氏を得たり。凡そ女學校進運の機は、人物を得るにあり。今の女學界の要、主として人才を此界內に懇聘するを先とす。

○海邊の避暑

海邊に暑を避くる女子よ、單に汗を忘れて横に臥し、日を空しく過すとなかれ。珍らしき草花、蝶々、虫、磯邊の貝、藻草、魚介の類を樂しみて採集し、以て自から研究すべし、以て子女の教育に資すべし。

片々

◉早乙女養成　高知縣の老農歎じて曰く、女學進んで、子守女、早乙女減ず、今の田植の拙劣、古の比にあらず、將に早乙女養成の必要を見んとすと。喜憂果して奈何ん。（太平新聞）

◉雜居后の西洋婦人　長崎の通信者、日本新聞に報じて云く、條約實施后、左したる相違とてはなけれど、西洋婦人は日本法律の範圍に控制せられんを恐れて歸國を促がすものありと。

◉横濱藝妓の盛衰　を論じて、万朝報記者は曰く、これ近來客の質朴になりしによると。蓋し其質朴は不融通の爲めなり、願はくは之をして久しからしめん。

◉烈婢さく子　の事につき、万朝報記者齊庵は、痛酷なる評說を試みたり、曰く、其裏面を見よ、人の肉を得んことを望みたる傭主あるなり、一人の肉を殺ぎ他人の肉を補ふことを實行したる醫師あるなり、肉を人に獻ずるは美なりとするも、人の肉を請ふは、美にあらず、慘虐なり、此の慘虐を實行せしむる仁術者も亦慘虐たるを免れずと。

◉異樣なる婦人の海外出稼奬勵論　は憲政新聞によりて主張せらる。曰く、

今や新條約の實施と共に內地雜居の擧あるに當りて、婦人が徒らに海外に渡りて醜業を營むを恐るゝも、內地にありて是等の婦人が生計を得る能はずして、公然淫を鬻ぎ情を賣るもの多きを見ば、其外人に對して醜態なるは同じく一なり、寧ろ這般無用的不生產的、劣等婦人は、此際宜しく海外の出稼移住を勸めて、以て善良なる同胞が內に在りて安心立命の地を堅からしむるに如かざるを知る。

◉庶子私生兒を厚遇すべしの說　時事新報によつて今ま主張せらるるは、頗ぶる情を得たり。曰く、

庶子の母たる婦人の身に男子が正妻を娶る以前より永く同棲するものあるは勿論、或は最初より正妻たる約束にて身を托し末は公の夫婦を期して子さへ生したる其中に男子が前約に背きて別に他人を迎へたる爲め其子をして日陰の身たらしめたる場合なきに非ず。たとひ錢にて購はれたる婦女の腹に生るゝも其子に變りはある可らず相應の家に生れたる子にして兄弟姉妹の間に衣食の供給さへも殊にして身の行末に不安の念を懷かしむるは人間の至情に於て果して忍ぶことを得るや。

要目一覽

◎新女大學　時事新報。七、六（第十一回）以下
◎藝妓の弗匣　万朝報。七、六以下（七月十六日。煩腦の數、一百八回にて斷絕）
◎女尊男卑の眞相　京華日報。七、六（第二）以下
◎女學校巡り　千代田日報。七、六以下
帝國婦人協會（七月六日）。女子裁縫專門學校（七月廿日）。
◎令孃鑑　千代田日報。七、六（八十一回）以下
加藤悅子（七月六日）。山內壽子（七月十日）。濱尾淳子（七月十八日）。
◎夫人の素顏　報知新聞。七、七以下
毛利安子（二）（七月七日）。山本權兵衞夫人登喜子（七月廿九日）。
◎坤道論（社說）　東京朝日新聞。七、八。
◎女子の服裝（寄解）　中央新聞。七、九（第四）以下
◎男女の學說　時事新報。七、九（第廿三回）以下
◎善美なる家庭組織（續）　同前。七、廿、以下
◎婦人の生意氣は鳥なき里の蝙蝠のみ　同前。七、十一（社說）
◎横濱藝妓の盛衰　万朝報。七、十五。
◎沒趣味の國民（社說）　同前。七、十五。
◎日本婦人の美　人民。七、十六。
◎夏の家庭　大坂每日新聞（七月七日）（以下）
◎庶子私生兒を厚遇すべし　時事新報（七月十九日）
◎仁義は之に反抗す（神樂坂烈婦の事、社說）　万朝報（七月十九日）

◎婦人の海外出稼(社說)　憲政新聞(七月廿日)
◎小學女生徒の服裝に關して(寄書)　信濃每日新聞(七月十八日)
◎葬式部の人生觀(梅澤和軒)　帝國文學(第五卷第七號)
◎小兒の病氣(醫學士三輪信太郎)　教育實驗界(第四卷第一號)

時報

◎華族女學校行啓　皇后宮陛下は、七月十八日華族女學校生徒卒業證書授與式に臨ませらる。

◎女囚　板垣伯、監獄改良に熱心せられ、就中女囚が乳兒携帶の一事に同情切なるよし。伯語つて曰く、余が地方遊說の途次、實地に付て之を其地々の人々に訊したるが、今日に於て、京都、香川等の府縣には、既に女囚の乳兒を他に預かるべき慈善事業出で來りぬ、其の改良の費用の如き甚だ多きを要せず、貴婦人淑女が日一錢宛を義捐せば足らんと。

◎星野女史の美擧　久留米の星野房子女史が熱心なるは女學校創設に際して數千圓の金を寄附し校舍の建築を助け其後衞戍病院長を聘し數十名の女子を卒ひて看護術の練習をなし又北辰會なるものを組織し武術の稽古をなす抔は其顯れたるものにして其他婦人協會に長として今日迄盡力する抔枚擧に遑あらず今般又三潴郡鳥飼村菅原政乃女史が東京濟生學舍に入り醫學を修業せんとするに際し星野氏は其學資を助くるの約をなし久留米の地にして女子の醫業者なきは慨歎に堪へずとし必らず菅原女史の成業を期し居ると云ふ感すへきなり因に記す菅原氏は來十四五日頃久留米出發の豫定なりと(七月七日、福岡日日新聞)
因に云ふ、星野女史更に慈善病院設立の爲に目下勸誘運動中なりときく。

◎烈婦香川さく子　に對し大日本積德會は、去十六日外神田福田亭に例會を開き、左の賞狀に金五圓を添へて贈りしとぞ、

東京市牛込區神樂町十番地會田きく方寄留
香川縣中郡江奈井村仲町香川純吉長女　香　川　さ　く

於戯香川さく子嬢は天資至誠從順にして會田氏に雇任する事玆に十年餘常に孜々として其任命を全ふす會々傭主乳房の要腫に罹り醫に就き診を求むるに曰く速に切除せざれば命と共に終らんのみ然れども手術を施すの時創面を被覆すに他人の皮肉方寸餘を要す之れなければ手術に就くも其詮なしと玆に於て雇主日夜苦痛に堪へ難きを訴へ普く治療に要する人肉を最近の親族及び其他の男女に哀求するも誰れ一人の之を應諾するものなし傭主悵然として望を失ひ憂愁惜く處を知らず是時に常て貴孃主を愛するの心此態を默視するに忍びず奮て自身の肉を割かん事を諾す明治卅一年六月二日順天堂病院に至り手術臺に登り泰然として痲醉藥を吸引し術者をして內股の皮肉を割かしめ之れを雇主の創面に縫着せしめ爾後四十餘日にして主從共に創部殆ど癒へ寢食平に復す於戯貴孃も會田氏に居る中薪炊の賤事を執り恩誼僅かに十歲餘りにして此義勇の擧をなせしは實に德行の龜鑑にして本會の素志に適ふ故に明治三十二年七月二日積德會總會に於て全會一致貴孃が空前の義烈を感歎し薄か金五圓を贈呈し其美行を表賞すること爾り

明治三十二年七月十五日　大　日　本　積　德　會

◎女子出札掛　日本鐵道は停車場の出札掛に女子を用ひんとの考案中なり。

◎松本高等女學校　は五万二千圓の豫算を以て設置の事、松本町會にて去十四日議決せり。

◎仙臺の篤志看護婦人會員募集　は來る九月よりはじめ其節、小松妃殿下の御臨場を奏請せんとす。

◎富山婦人協會　越中富山の同婦人協會は、監獄署にて出生せし孤兒一名を引取り養育することを議決せり。

◎護國婦人教會　は京都村雲瑞龍寺本堂にて去二日發會式を擧げたり、總裁は村雲尼公なり。

◎信州長野の柳原婦人會　と云ふもの去二日發會す。

◎津田梅子女史　昨日入港歸朝せらる。

◎佐賀縣婦人淑友會　と云ふもの去十六日佐賀市にて開く。

◎琉球女學生　首里の女子小學校生の服裝を改正し和裝たらしむべしとの議論多きよし。

一冊金三十錢

巖本善治編

再版 海舟餘波

一冊金三十錢
郵税金四錢
郵券代用金三十七錢

海舟先生在世の日、編者毎週其門に趨りて清話を聽き、歸つて直ちに筆記し、一々其眞面目を書留めたる者、今殆んど堆を成せり。蓋し世上大率ね幕臣の勝安房守を傳えて、偏えに其苦功を賛す、素より是れ可ならざるに非ずと雖とも、先生苦心の存する所、寧ろ其幕府を明渡すにあらずして、反て明治新政府の維持建設にあり。但夫れ先生能く形跡を沒し、功名を讓り、巧に韜晦して擾々の評を避くるの故に、當代多く之を知さる耳。今や先生一去して、亦之を秘するの要なし。此書、主として此般の消息を傳ふ。坊間既に一二の著書あり、略ぼ其梗概を言へる者の如きは、此書皆省き、凡そ先生の事業言論にして未曾て世に出でず未曾て世の思到せざる者を輯收す。悉皆編者親しく聞く所にして、毫も他子の文を加えさる也。又別に先生の寫眞を添ゆ。是れ最近の撮影に係り、コロタイプによつて製作す、銅版鉛版をもて比す可らず。眞采歷々、光炎爛々として面あたり接するが如し。又先生修辭の文稿一篇を寫眞版に附し併て添ゆ。是昔し山岡鐵舟長逝するの日 先生自ら偈を作て吊する者 其辭悲痛、達人知己を惜むの情 流露澎湃す今ま斧削の痕點々視るべく、眞に一代の珍なり。如今再版成り正に發賣す。同好の士希くは一讀を賜へ。

東京巣鴨村庚申塚
女學雜誌社

海軍軍令部長
海軍大將 子爵伊東祐亨君題辭
水路部長
海軍少將 肝付兼行君序文
勝山泰東編輯

大日本軍艦帖

六月十日寫眞
銅版菊版本

定價金四拾五錢郵税六錢●郵便切手代用一割増

帝國は世界無二の海國にして海國的發達せしむる之れ自然なり今や海事思想の普及せざるべからざると天下の輿論となり海軍は當に擴張せられつゝあり されど將來世界海上の權を掌握して國威を宣揚し國利を增進せしめんには更に大に擴張せざるべからず

本書は最初に簡明なる帝國海軍小史、海軍の職務、軍艦類別及帝國軍艦表を記載し次に我國現時の新舊軍艦を各鮮明なる寫眞銅版に寫し 各艦に就きて簡易なる説明、小歷史及各艦特有の逸事を附記し讀者をして閲覽の間に自ら趣味を覺ゑしむ之を聞く海王國として世界に雄飛する英國人は男女老少殆んど其軍艦帖を所持せざる者なく非常に之を珍重すと、將來東洋の大海國として卓立せざるべからざる吾國民は宜しく一本を坐右に備へ以て帝國海軍の形勢を知り奮起する所なかるべからず又各學校の參考書、生徒の賞品には至極適當なり

爲替は飯田町支局
發行所 東京市麴町區富士見町六丁目十番地 東光社
大賣捌所 東京堂 上田屋 教文館 東海信文合資會社 北陸館

故若松賤子女史譯述

再版 小公子

全一冊洋裝美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵税八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝと數十百回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化す、徳に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し。讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ 何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち茲 其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、郷友松井昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元 東京日本橋區本町三丁目 博文館
大賣捌 東京巣鴨村庚申塚 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治二十五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治二十五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY